

軍人恩給連盟浮羽郡支部 編

後に続く 真の 日本人へ

—大東亜戦争の思い出—

明窓出版

「どうしても、これからの日本を担う若者
たちに我々の思いを知っておいてほしい。」

祖国日本の未来を信じて青春時代を戦場に捧げた
祖父たちの、温かくも痛切な53編の物語。

臨場感あふれる回想録を前に、
新世紀の日本の針路を共に考えよう。

軍恩連盟全国連合会会長 参議院議員 海老原義彦

軍人恩給連盟浮羽郡支部 編

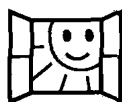
明窓出版

後に続く真の日本人へ

～大東亜戦争の思い出～

あと つづ しん にほんじん
 後に続く真の日本人へ
 だいとう あせんそう おも で
 —大東亜戦争の思い出—

ぐんじんおんぎゆうれんめいうきはぐんしぶへん
 軍人恩給連盟浮羽郡支部編



明窓出版

平成十三年十月十日初版発行

文責——梯 禮一郎

発行者——増本 利博

発行所——明窓出版株式会社

〒一六四—〇〇二二

東京都中野区本町六一—二七一—三

電話 (〇三) 三三八〇—八三〇三

FAX (〇三) 三三八〇—六四二四

振替 〇〇一六〇—一—九二七六六

印刷所——モリモト印刷株式会社

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

2001 © R Kakehashi Printed in Japan

ISBN4-89634-073-6

ホームページ <http://meisou.com> Eメール meisou@meisou.com

目次

序文……………武下 貴 8

田主丸町の部

青春回想……………田主丸町 明石田 草場 昌衛 10

七月がくるとバシー海峡が甦る……………田主丸町 麦生 重松 定夫 20

寺内元師を想う……………田主丸町 豊城 田中 満寿雄 25

思いでの地、旧満州東寧を訪ねて……………田主丸町 豊城 林田 一 28

追憶……………田主丸町 益永 水城 正弘 39

歓喜の日……………田主丸町 豊城 古賀 進 41

回顧録……………田主丸町 以真恵 小林 久登 42

ビルマ巡礼に想う……………田主丸町 柳瀬 柳瀬 久登 53

南溟の灯（ブーゲンビル島の青春記） 抜粋……………田主丸町 秋成 立山 集 69

コタバル・シンガポール作戦……………田主丸町 森部 南 裕 100

私の思い出……………田主丸町 麦生 上野 春三郎 101

武器なく、食べる物なく……………田主丸町 西小田 田中 時男 103

台湾にて火薬輸送の思い出……………田主丸町 森部 倉富 義治 104

カチン族の若者と共に……………田主丸町 小川 小川 実 105

私の終戦……………田主丸町 殖木 栗木 衛 111

老境に至りて……………田主丸町 水縄 森田 佐和子 112

吉井町の部

回想……………吉井町 清宗 大山 成範 116

バイアス湾以来の想い出……………吉井町 立丁 大山 正義 126

駆逐艦「卯月」はグアム島に到着した……………吉井町 能楽 松田 実 130

戦場を偲びて……………吉井町 若宮 安元 繁夫 135

わが戦友の声 第一次五原作従軍の記……………吉井町 八竜 内山 種次郎 141

南太平洋海戦……………吉井町 西小江 吉松 定雄 147

兵となりて 中国轍わだちのあと……………吉井町 高橋 二宮 一郎 149

中島 遜ゆずる 中隊長のこと……………吉井町 東屋部 甲斐田 安 157

想い出……………吉井町 福永 田代 政幸 160

想いは遠い地の果て……………吉井町 高橋 尾花 保証 162

戦地の珍味……………吉井町 西矢部 足立 悟 165

ヤップ島籠城の思い出……………吉井町 島 篠原 博之 167

想い出……………吉井町 屋部 小柳 律子 174

アウステン山の脱出……………吉井町 東延寿寺 安陪 貞之 176

戦時休暇 父母との別れ……………吉井町 屋部 大石 貢 179

思いでの The Past……………吉井町 上新町 権藤 博 181

私の軍歴……………吉井町 管 中川 弘 182

学徒動員の思い出……………吉井町 東屋部 足立 房子 183

軍恩に支えられ……………吉井町 清瀬 柳瀬 久恵 186

私の戦争物語り……………吉井町 新治 梯^{かけはし} 禮一郎 187

- ① 愚直の半生独りごと
- ② こんなウソツキ日本人がいたとは
- ③ 靖国神社に参拝して
- ④ 大東亜戦争

浮羽町の部

私の戦争体験……………浮羽町 古川 杉 富太 216

あだにぞ散るな大和桜は……………浮羽町 流川 麻生 等 222

満州での思い出	浮羽町 東隈ノ上 綾部 久雄	223
シベリア慰霊訪問	浮羽町 浮羽 水野 治信	244
戦争と私	浮羽町 古川 秦 孝俊	246
過ぎし日	浮羽町 古川 諫山 フミ子	248
終戦と民主主義	浮羽町 流川 原 俊夫	249
回顧	浮羽町 高見 水城 英夫	250
戦後ビルマ戦跡を訪ね	浮羽町 西隈ノ上 古賀 嘉登	259
母への感謝	浮羽町 古川 永露 義光	269
書き残すべき私の歴史	浮羽町 高見 江藤 義男	270

転戦に転戦を重ね……………浮羽町 高見 石井 啓七 276

会員推薦の部

將軍 山下奉文の最後……………佐藤 稔 提供 280

従軍慰安婦考……………深川 貞祐 283

連れ去られた従軍看護婦（世界日報より記載）……………289

「思い出のままに」を書いた冊子の一部から……………福岡県筑紫町市 川上 博民 292

地獄の富坪……………開 勇 提供 300

あの戦争 「ガ島」撤退——二万英霊の加護により……………和田 豊 提供 302

あとがき……………梯 禮一郎 308

序 文

軍恩連盟浮羽支部 会長 武下 貴

戦後五年を経た昨年三月半ば、梯さんより、会員の皆さんもおおかた八〇歳前後、余命いくばくもない。大東亜戦争の事実を思い出として、戦争を知らない若い人たちへ遺す方法についての相談があった。

役員会にも回り、浮羽郡三町の会員より原稿を募り「大東亜戦争の思い出」として、単行本を出すことにしました。各支部長よりその趣旨を会員にお伝えしたところ、多数の応募を戴きました。みな、会の趣旨を理解され、ウソのない貴重な体験を述べていただき感激しました。

思えば我々は、何物にも替えがたい一命を、東亜の植民地化防衛のため、解放のため、わが国の聖戦にこの身を捧げました。そして東南アジアに征った我々は、人間としての扱いを受けていない、奴隷化された民族を見て驚きました。その彼等は、自分たちに対等につき合ってくれる日本兵に親近感を抱いて歓迎したのです。

「戦い我に利あらず」敗戦の憂き目を見るなか、わが郷土からも、一二五二名もの戦死者を出しました。今は亡き戦友を思うとき、彼等は国のため、同胞のためにと若い命を散華させただけども、東南アジアの諸国は逐次独立し、それが世界に拡がり、人種差別も殆どなくなりました。この真実は後世に伝えたいと思います。

戦後、占領下につき、平和、人権、自由の甘言に酔い、気づいたときには、歴史の真実を捏造したり、歪曲したりした人々の多いのに驚きました。

私たちは、戦後においても東南アジアに行き確かめました。人の為すことには、あやまりもありました。しかし明治、大正の日本人が、自国の非植民地化の危機に目覚め、近隣諸国のためにも必死の努力を重ねたことも事実です。

その時代にお国のために命を捧げた九六名の郷土先輩の霊に合掌。あなた達の尊い犠牲は大東亜圏の人々も十分に知っています！

わが国の、端っこ九州筑後の片田舎、浮羽のわれわれの声も聞いて頂けたらこの上ない^{よろこ}欣びであります。

田主丸町の部

青春回想

田主丸町 明石田 草場 昌衛

時あたかも昭和十二年七月七日、朝靄けむる慮溝橋の静寂を破った一発の銃声は波紋を呼び、ついに日中大戦争へと拡大しようとは、当時誰が予想したであろう。

ここかしこと、赤紙召集令状がくるようになった。

私達昭和十三年徴集兵は、昭和十四年正月、屠蘇気分もさめやらぬ一月二日に故郷を出て、三日下関に集合。軍装に替へ故国を後にして、中国塘沽に上陸し、十二日大同に到着したのは早朝五時頃であつたらうか。

第二六師団長、後宮中将閣下の出迎えをうけ、「寒くはないか？」と声をかけられ身の引きしまる思いだつた。中国軍兵舎の跡が輜重第五三二一部隊の宿舎となつた。

ラッパに明けて、ラッパに暮れるという日々、それから四年という歳月が様々な思い出を残して流れていった。

その間、心に残る作戦や行動についていくつか書いてみよう。

昭和十四年十月下旬から十一月上旬、厚和―武川の駐留部隊の糧秣^{りようま}輸送に従事する。

馬百余頭、ラクダ五〇頭の編成で、片道一日の行程だつた。

ある日部隊大休止の時、丘の上の警戒を命ぜられた。その時、少し離れた所に墓標三柱が目についた。近づくとその中の一柱に、中野安雄之墓と記してあつた。私はハツとした郷里九州の水繩小学校での学

友名であるからだ。同姓同名という事もあると思つたが、やはり気にかかる。砂漠の中では枯れススキ一本ない。私は水筒を取り出して、一杯のお茶を目標にそそいで、部隊に走り後を追つた。それが、最初で最後、まさに一期一会である。

程なく夜間討伐に参加する命令を受け、急遽張家口から赤土の道を太行山脈に向かった。

途中で、歩兵一ヶ隊が「沫源の山中にて全滅」の報に接したが、ただ黙々と、昼夜の別もなく沫源へと急ぐ。

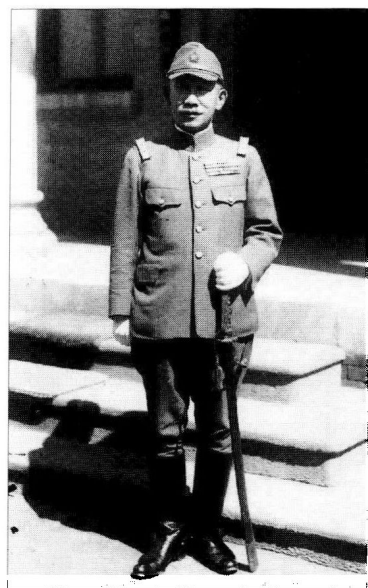
沫源にやっと着いたが、目にしたのは、全裸の兵隊を現地人が引きずり下ろし、自動車の荷台には、なおたくさん死体を積み残したまま、アンペラを覆つて何処かに運び去つて行く光景だった。その時私は、明日は我が身と強く感じた。

「中原大会戦について」

昭和十六年四月下旬から六月下旬、我が輜重泉五三二一聯隊は、糧秣輸送に従事する。友軍の追撃は早く、輸送隊も五個部隊の連携がうまくいき、戦果も大きかった。

黄河河畔に追い詰められた敵は、行き場をなくして武装解除したのである。その数七万とも八万とも言われた。

毎日、毎日捕虜の護送が続いた。一大戦果のあがつた作戦だった。



陸軍中将 後宮 淳 閣下

「浙韓作戰」

昭和十七年七月から八月、中支浙杭省における浙韓作戰である。

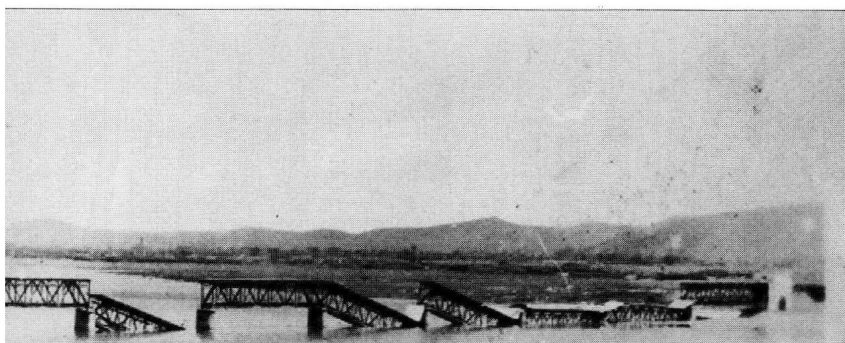
杭州の站到降り部隊を整えて、風光明媚の西湖のほとりを横目でみながら市街へ出る。錢唐江大橋を渡り、市外の部落に十日分の食料で宿営した。以後現地にて調達すべしとの事だったが、最後尾だから行く所には全く何も無い。永康の町で三日間休養した。その頃から梅雨になり、毎日毎日雨、雨、雨に降りこまれ軍服の乾く暇もない有り様であった。金華山の山中では大雨になり、河川の増水で渡河出来ない。時だけが休みなく去っていく。

七月十七日までに麗水に入城せよと命じられる。

万難を排して行かねばならぬ、必死になって、麗水へと、ただもくもくと進む。午後三時頃ようやく入城する。温州まで追撃の手をゆるめなかった。

私は渡河点の警備を命ぜられ残留した。昼は暑く、ハエに悩まされ、夜は蚊に悩まされた。地獄の麗水から帰隊命令が有り。九月中旬、満期の命が下された。

十月二十日、私は現地満期をして、大同炭鉱株式会社に入社した。昭和十九年二月二八日、再び召集をうけ第六二師団の第四二八七（シニパチ）部隊に入隊。二ヶ月間の訓練の後、洛陽作戰に参加する。



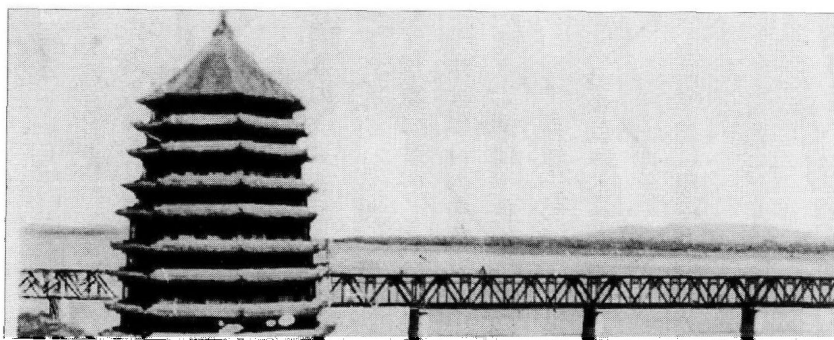
新郷―テイ州への黄河大橋は三千六百数十メートルと聞く。渡りきるのに四五分を要した。ひたすら洛陽へ洛陽へと……、心の中何を思うのか、ただ黙々と任地へと急ぐ足は重い。グラマンが二機飛んできて東に行ったかと思ったら引き返してきた。低空で激しく機銃掃射をして、サーッと西の空に消えていった。

私達が部落を通る時、野砲隊の軍馬が散々たる被害を受けていた。可哀そうと思うがどうする事もできなかった。

我が隊は洛陽への道を急ぐ。洛陽ではまた野砲が激しく、山腹に向かつて砲撃をつづけていた。

一応我隊は目的を終り、新郷に引き揚げて休養をとっている時、現地召集者は残留し、本隊は七月中旬、現在地を出発して、沖縄の守備を命ぜられた。米軍の猛攻にあい無念であった。師団と共に、第四二八七部隊もまた運命を共にし、全員玉砕、沖縄の土と化した。また、現役時の泉二六師団輜重第五三二一部隊も、時を同じくこの比島の山野に散華する。ああ。なんたる運命ぞ……。

国家安泰を念じ世界の平和を願い、異境の地に散華せし幾多の友よ。若き青春を国に捧げられた戦友御遺族の心中を察しながら、御冥福を祈りつつペンをおきます。



錢唐江大橋

あゝ戦友——昭和十三年兵の思い出——

昭和十四年正月五日、下関に集合した昭和十三年徴集兵は、連隊の初年兵受領員（本部村上軍医、森田曹長、一中隊斉藤曹長、二中隊水上曹長、三中隊土屋曹長等）に迎えられて輸送船に乗船、波荒き玄界灘を一路西に向かったのである。

乗船直前のことである。見送りに来ていた戦友の家族らしい婦人から声をかけられた。

「たった一人の弟です。よろしく願います」それが小木戸悟のお姉さんだった。

船内では演芸大会が開かれた。皆、中々の芸達者である。中でも砂本善登のハーモニカは本格的だった。「別れのブルース」には盛んな拍手が湧いた。数日後、塘沽上陸。その後四年という歳月を過ごすことになった中国大陸へのそれが第一歩であった。太沽車站から鉄道により、天津、北京を経て、長城線を越え懷来、宣化、張家口を通過して駐屯地大同到着。屯営は長春門外の支那式兵舎だ。オンドルの上に一枚のアンペラを敷いた簡単なものだ。入隊時の現地の気温は零下十五、六度、洗濯物は瞬時にカチカチになるといふ寒さである。二十六師団というのは元来、熱河承徳に駐屯していた独混十一旅団が基幹で、事変後師団に改編されたものである。我々が入隊した当時は現役の四年兵までがいた。現役は久留米十二師団管下の壮丁で、北九州出身者である。これに熊本六師団、東京一師団の両師団管下からの召集兵が居り、部隊の空気は相当に複雑なものようだった。雑煮一つにしても関東と九州では作り方が違うし、親父のような髯だらけの兵隊も居るし、古年次兵のストレスの発散は結局初年兵に向けられたのであろう。

昭和十四年兵からは名古屋三師団管下から入隊して来て、昭和十五年頃には完全に現役師団となっ